鍛冶ロールで生きていこうと思う。

どおん！

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かなり苦労して手に入れた時代の最先端を行く仮想空間を舞台とするＭＭＯＲＰＧを楽しんでいると、いつしかその世界は現実となっていた。Ｇａｍｅ　Ｏｖｅｒ＝死となってしまったその世界で、プレイヤーネーム〈ｓｕｕ〉こと須崎辰樹は鍛冶屋として生きていくことを余儀なくされてしまう、果たして彼はこの世界を生き抜くことができるのか!?

※これはＳＡＯの世界で鍛冶屋となってしまったオリ主のお話です。鍛冶スキルのことはほとんど知らないので知っていることがあれば教えてください。それでもわからないところはガンガン捏造していこうと思います。そういったものが苦手な方はすみませんがご覧になられるのをお控えください。

ちなみにクソ初心者ですので暖かい目で見守ってください。

目　次

始まり ―――――――――― 1
パーティーを組むのはＲＰＧにおいて定石 ―――――――――― 6

始まり

――西暦２０２２年の１１月６日、待ちに待ったその日がついに来た。世紀の大発明であるＶＲ技術を用いて、昔から語られていた人々の空想を現実に変えた、いや、変えるだろうモノ。世界初のＶＲＭＭＯＲＰＧ、ソードアート・オンラインの正式サービス開始日だ。このゲームは非常に僕らゲーマーの、いや、なんなら普段ゲームに触れない一般人ですら関心を抱くんじゃないかなぁ。うん、多分抱くはず。マジでガチでリアルにすごいやつなのである。そう、このゲーム何を隠そう仮想空間で冒険をするゲームなのだ！つまりは別の世界で本物の冒険ができるわけだ。そりゃ憧れるってもんだよねぇ。僕だって一か月以上前からＳＡＯのことしか考えられなかったくらいだし。それにここまで注目度が高いのにはもう一つ理由があったりする。なにせ今までに発売されたＶＲのゲームはこのＳＡＯ以外ぱっとするものが全然なかったりするからそりゃあまあ期待値も自然とうなぎ上りなわけである。超狭いワールドでででかいパズルを組み立てるだけのゲームって誰得なんだろうね。

「くぁ…眠い…」

ふと大きなあくびが漏れた、昨日はワクワクしすぎたせいで中々眠れなくて、それで

もサービス開始時間の１３時に遅れないように目覚ましを何重にもかけておいたおかげ何とかこうして起きることができている。ナイス昨日の僕…、ナイスゲットアップ、３０分前の僕…　少し前の自分にありったけの称賛を送りながら机の上に用意していたバイクのヘルメットの様なもの。ヘッドギア型ハード、ナーヴギアに手をかける。ちなみに、ハードというのはゲーム機のことである（ｗｉｋｉ調べ）

　しっかし、これ買ってもらうの大変だったなぁ…。このナーブギア、最新鋭のハードであるので当然お値段もお高いのだ、気になるそのお値段何と１０万円。そんなものを一介の中学生が買えるはずもなくすぐさま両親に相談を待ちかけた、そこで我が父と母購入に対する条件として提示したのが定期テストの五教科の平均点９０点以上というものである。なんだよテスト五教科平均９０点以上って、普段７０くらいしかとれてねーっての！とか何とかいって駄々をこねようとしたがうちの父親が「あれれー？そぉんな顔してどーしたー？もしかして、できないとかー？ｗｗ」って煽られてもうほんとスゴイイラッと来たのでその日からマジで真剣に頑張り始めた、テスト一か月前だというのに一日４時間くらいひたすら復習、復習、復習をエンドレスで繰り返しまくった。その結果なんとか目標点数を取ることができました。え、なに？勉強時間が少ないって？普段帰ってきてもゲーム漫画アニメ生活の僕からしたらかなりした方なんです…。

　テストがすべて帰ってきた日、僕は学校にいる誰よりも速く、雪崩やどこかの兄貴よ

りも速く家に帰り、父親と母親の前テストを差し出し、父親に今世紀最大のどや顔をかましてきた。ちなみにナーヴギア代は父さんのお小遣いから払われた。煽りすぎと母さんが珍しく怒っていたなぁ、ざまぁ…。

「あ！もう1時過ぎてる！」

これから時計を見るとすでに1時をすぎていたので、急いで手に持っていたナーヴギアを被りベットに横になる。ＳＡＯの世界ではどんな人達に出会えるのだろうか、どんな冒険が待っているのだろうか、あとはどんな役割でプレイしようかとか、期待で高鳴る胸に手を当てて、口元に笑みを浮かべながら僕は呟いた。

「リンク・スタート！」

呟くと、一瞬目の前が真っ暗になって、続いて真っ白な空間が広がり、赤、青、緑、黄色、オレンジと色々な色が電車に乗ってるときのライトみたいに、見えたと思ったらシュッと通り過ぎて、また見えたと思ったら　シュッと過ぎていくのを何回か繰り返し、そのあと言語設定やらなんやらの設定が画面に表示され、そのあとに目の前にｃｏｍｐｌｅｔｅという文字が表示された。その文字が消えると、次は名前の入力らしく目の前にはＲＰＧゲームのスタート時によく見る横長の何も書かれてない長方形が、手元を見るといつの間にかキーボードが現れていた。ふぅ…ようやく一息つける…そう思いながら手元のキーボードを操作して名前を打ち込んでいく、プレイヤーネームはいつ

も使っている名前である＜ｓｕｕ＞にしておいた。

次は見た目の設定らしく目の前に身長や髪色や声などさまざまな項目をここですべて設定するらしい。さぁ、大事な大事なキャラメイクの時間である、まずは男か女かの選択だ、ここは当然正位置！じゃなくてリアルと同じく男を選ぶ、別にネカマとかには全く興味はないからしょうがないね。次に声、これも男で遊ぶ以上特に変えなくていいかな？身長とか顔も特にはいじらなくていいか…髪色だけリアルとは違う色に変えとこっかな、まあ茶髪でいっか、他にも細かい設定はあるがどうでもいいので全てお任せにしてキャラ設定を終えて、ゲーム開始ボタンを押す。すると目の前にＷｅｌｃｏｍｅ ｔｏ Ｓｗｏｒｄ Ａｒｔ Ｏｎｌｉｎｅ！と表示され一瞬視界が真っ白に染まり

――目を開けると僕はＲＰＧの世界でよく見るような街の中にいた。

さぁ、いよいよここから冒険の開始である。ベットでナーヴギアを被っていたときよりも、昨日の晩に想像に耽っていた時よりも強いワクワクが胸の中で抑えきれず、脳みそがやべぇ！やべぇ！なんかわかんないけどすごいワクワクしすぎて楽しいやべぇ！状態になり自然と走り出していた、マンガでよくあるいわゆる勝手に体が動いたってやつである。まあ僕の場合現在進行形だけどネ！（たぶん違う）

さて、こんな明らかに異常な行動は普段の僕ならいくら興奮してもしない、例えしてしまったとしてもここまではいかないのだが、この時の僕はテスト勉強のストレスと初

めての仮想空間のせいで完全にタガが外れてしまっていたのである。

「うっひょーーーーーー！行くぞーーーーー！」

　そんな意味不明な事を叫びながら、仮想空間で疲れないのをいいことに結構広いこの始まりの町の外周を興奮に身を任せて全力で走り回り、途中でようやく興奮が収まって賢者タイムになり死ぬほど恥ずかしくなって1時間くらい動けなくなるのは走り始めてからから３０分後の出来事であった。

パーティーを組むのはＲＰＧにおいて定石

落ち着いて深く息を吸い込み、そして吐き出す、狭い路地裏には誰もおらず、スゥー、ハァー、と自分の規則的な呼吸の音が響く、少し落ち着いたので顔を上げ、先程の奇行のことを思い出して再び顔を膝の間に埋める。なぜあんな奇行に走ってしまったのだろうか。さっきの僕を殴り殺したい…、現在僕は路地裏で三角座りをして自分がつい先ほど作ってしまった黒歴史と真正面から向き合い、途轍も無い羞恥に駆られていた。もう外に出れない…そう思いながら右手の人差し指と中指を空中で上から下に振り下ろす、するとメニュー―目の前の空中に現れた六つのアイコン―が出てくる、さっきからメニューを出しては直すという行為をひたすらしていた。この世界のメニューの開き方、すごく格好が良く、ワタクシはとても気に入っております…、などと現実逃避をしていても始まらない、視界の左上の方にある時計の時刻を見てみると１４：５２と表示されていた。つまりゲームが開始されてから１時間と４０分くらいを無駄にしているのである。流石にそろそろ行動を起こさなければ何のためにテストを頑張ったのかわからなくなってくる。大きく息を吸い込み、静かに路地裏の隅から立ち上がった。とりあえず遅れを少しでも取り戻そうと思い、現在取得可能なスキルをみながら武器屋を目

指すことにした。
「んーと、片手直剣、細剣、曲剣、短剣、片手棍、両手剣、投剣、両手斧、槍、武器スキルだけでもこれだけあるのか…、武器選びも結構悩むなぁ…えっと、他にはどんな…うわっ！」
ブツブツ独り言を言いながら歩いてると柔らかい何かにぶつかり、後ろに倒れて思い切り尻もちをついてしまった。イタタタ…、いや、仮想世界だから痛くはないけど…、うん、やはり歩きスキル確認は危険だったか、歩きスマホと大して変わんないしね…、二宮金次郎はなぜ許されたんだろうか、あの人確か歩き読書の人だよね？なぜ彼は許されて僕らは許されないのか！…いや、単純に時代のせいだろうけど。まあそんなくだらないことはさておき、多分人にぶつかったんだろうしとりあえず謝んないと…怖い人じゃなけりゃいいなぁ。
「その、すいません、ちょっとスキル見ながら歩いてたもんで…」
そういいながら顔を上げるとそこには黒いセミロングの髪の女の人が立っていた。何というか、大して可愛いわけでもなく、不細工でもなく、どこにでもいそうな純日本人の女の人の顔だった、悪くいってしまえば無個性な顔、ＴＨＥ　モブ、みたいな感じの顔だった、顔の造詣が比較的自由に行えるこのゲームでこんな顔のアバターを使っているってことはあまり目立たないようにアバターを作っているんだろうか？などとと

ても失礼なことを考えたり推理をしたりしていると、目の前の女の人は快活にニカッと笑いながら口を開いた。
「こっちこそぶつかっちゃってごめんね、けど何か見ながら歩くのは危険だからやめといたほうがいいよ?」
そういって女の人はこちらに手を差し伸べてくれた。
「あ、はい、すいません。次から気を付けます」
そう返しながら僕は手を取って立ち上がった。並んでみてわかったのだがこのお姉さん、結構身長が高い、僕よりも僕の頭2・5個分くらい、ちなみに僕の身長は148cmでクラスでの背の順はやや前の方である。
「それにしても、スキル見ながら歩くなんて熱心だね〜、あなたニュービーなの?」
「え、えっと、にゅー、びー?なんですかそれ?」
軽く首を傾げながら、目の前のお姉さんが言った謎の言葉について考えてみる。にゅーび、にゅーびー、いやにゅーびーって何、また日本は意味の分からない和製英語を作ったのか?まったく、着いていけないぜ…
「本当に初心者なんだね、よかったらあたしがいろいろ教えてあげようか?」
ふふふ、と笑った後、お姉さんはこちらに手を伸ばしてきた。…今この目の前のお姉さんはド素人の僕にレクチャーをしてくれる、的な意味のことを言ってなかっただろう

か？言ってましたね、間違いない。（確信）

「え、い、いいんですか？」

　唐突すぎて少し噛んでしまった、な、なんかわかんないが気付いたらパーティーメンバー獲得のチャンス!?というかパーティーに入れてもらえるチャンス？やったぜ！あんな奇行をした後だからもうしばらくソロでしかプレイできないって諦めかけてたけど、神様は僕のことを見放してはいなかった！やはり、このスーに運命は味方しているッ!!

「いいよ、なにせこのゲーム可愛い女の子一人だと男どもが寄ってたかってナンパしに来るから大変だし。それも初心者なら余計に付け入ろうとするから面倒なんだよね…、あたしもβの頃は追い払うのにどんだけ苦労したことか…」

　と、かなりげんなりした顔で話しているお姉さん、先程と比べると目がかなり濁ってしまっている、まるで魚の目だ…。しかし、なるほど、アバターを地味なものにしている理由がわかったまあ男に言い寄られるのはだるいってうちのねーちゃんもいってたしなー。それより、今お姉さんが言っていたβの頃、というのはおそらくβテストの時、という意味で間違いないはずだ、ということはこのお姉さんはベータテスターと呼ばれる存在に間違いないだろう。ベータテスターとはＳＡＯのβテスト、つまりは発売前に行われたテストプレイのテストプレイヤーに選ばれ、実際にプレイしていたプレイヤー

のことだ（ｗｉｋｉ調べ）その数はわずか１０００人と大変貴重な存在…らしい。
　そんな人とパーティーを組めるなんてなんて幸運なんだろう！これはもう一切の躊躇もなくパーティー申請をするしかないッ！
「じゃあ、よろしくお願いします！僕の名前はｓｕｕです！」
　そう言って勢いよく手を前に出した。礼儀作法はあまりわからないが、パーティーを組む時とかはこうやって握手するといい気がする。
　お姉さんは少しキョトンとしていたが、意図が分かったのかニカッと笑いながらがっちりと僕の手を握ってくれた。その手はとても力強った。
「あたしはＫｕｒｏｇａｎｅ、これからよろしくね」
　ＳＡＯが始まって約２時間、僕に初めてのパーティーメンバーができた。よ、よかったぁ…、結局パーティーメンバー出来なかったや、へへ、もうこれからずっとソロかぁ…、へへ、ってならなくてよかったほんと…。
「じゃ、武器屋にでも行こっか！あたし装備まだ買えてないんだー。いやーしかしこんな路地裏に女の子がいると思わなかったよ、スーはここで何してたの？」
　どうしよう、さっきまでの
「あ、その、ちょっと色々ありまして…、そ、それよりクロガネさん、女の子なんてどこにいるんですか？」

あたりを見まわすが女の子なんて一人もいない、もしかして知り合っていきなりドッキリを仕掛けてきているのだろうか?そういうホラー系は苦手なのでかなりやめてほしいんだけど…。

「いや、あんたのことだけど」

クロガネさんは真顔で僕を指差した。

「え?」

後ろを振り返って見てみるが誰もいない、つまり僕のことを言っているようだ。ここでも言われるのか…、まあアバターの顔ほとんどいじってないし仕方ないか、てかよく考えりゃ今まで誰とも話してなかったから言われなかっただけじゃん…、いろいろ一人で勘違いしてただけじゃねーか…

「いや、あんた女の子でしょう?それともアレ、ネカマなの?」

「いや、僕男ですから，このアバターはちゃんと男のアバターですから!」

疑ってくるクロガネさんに本気で身振り手振りを加えて説明するもクロガネさんは信じてはくれず、またまた～とかそれで?とか言って全然まともに取り合ってもらえない状況が続く、クソッ、どうすれば伝わるんだ、と説明（もはや説得）をしながら必死に解決策を考えていると、パッと、この状況を打開できる作戦を思いついた。

「そうだ、クロガネさん、これ見てください!」

そう言って僕はステータス画面をクロガネさんに見せた。このゲームのステータス画面には能力値や取得しているスキルだけでなく性別も表示されるのだ！論より証拠、流石にこれで信用してもらえるはず。勝ったッ！第三部完！

「ふーん、どれどれ～、って、マジなのね…」

「だから言ったじゃないですか！って、あれ、クロガネさん、なんでちょっとずつ離れてるんですか？べっ、別に可愛い男の子アバターでそういったロールをする気とかそういうのはないですよ!?このアバターだってリアル基準でほとんどいじってな、ちょ、走ってどこいくんですか!?置いてかないでくださいよ！本当ですから！ほんとにいじってないんですよ！クロガネさーーーーーーん！」

引き気味に離れていったあと猛ダッシュで逃げるクロガネさんとそれを追いかける僕。この後１０分ほど鬼ごっこをする羽目になった。なんでさ！…ほんとなんでなの？